

## 『立教ビジネスレビュー』第3号 特集のねらい

第3号の主題は、“Globalization, Challenges for Managers, and Calls for Leadership”である。このテーマを掲げて経営学部が開催した国際シンポジウム（2009年6月12～13日）で報告された研究論文が、本特集号の支柱を成している。特集の企画は以下のとおりである。

P. クルグマンが第二次世界恐慌の始まりにも見えると評した、アメリカの住宅バブル崩壊に端を発する不況は、すぐさま日本にも波及し経済活動の混迷を深めた。今なお、出口を示す光明は暗い。国内経済の建て直しがきわめてゆっくりとしか進んでいないところを見ると、在来型のリーダーシップでは対応に限界があるということではないだろうか。一方、海外にビジネスチャンスを求める場合、中国、インドなど新興国での新たな機会を見逃せない。しかし、事業環境が先進国とは異なるだけに、日系多国籍企業の経営には、新鮮な目で経営スタイルを確立していくリーダーシップが求められよう。そのリーダーシップとはどのようなものであろうか。

R. スティアーズ教授（オレゴン大学）は、シンポジウムの基調講演で、グローバル企業で活躍するマネージャーには、国内企業で求められるのとは異なるリーダーシップが必要であることを指摘した。さらに、それが国によって異なるという多様性を強調した。コメンテーターを務めたA. バード経営学部特任教授は、グローバル・マネージャーに求められるリーダーシップには、各国共通の核となる要素があることに言及した。二人の強調点の違いは、グローバル・リーダーシップそのものが多面的であることに由来するのであろうか。リーダーシップをめぐる実証研究へのニーズが大きいことを示して余りある。

本号の特集論文をみておこう。Ishikawa 論文は、日本企業において、どのようなリーダーシップがよい成果をあげているかを、研究開発科学者を対象として考察した。スティアーズ教授の下で研鑽した成果を反映した良質の論文である。Maquito & Carbonel 論文は、フィリピン経済特区での産出が、雇用の安定度、ローカルコンテンツ割合、輸出先国市場の動向に依存することをふまえ、サプライヤーの経営戦略に関する含意を整理した。Onishi 論文は、紛争解決のスタイルが国レベルの文化的特質にどう影響されるかを考察して、投資先国としてのタイとヴェトナムの事業環境に関する情報を提供している。Ryu 論文と井上・宋論文は、中国を取り上げている。前者は、日系企業が社会に対する責任を重視した経営をすることで企業価値を高めることが重要であると主張している。後者は、在中国外資企業の戦略的人材マネジメントとその企業成果を分析し、好い業績をもたらす経営施策を吟味している。いずれの論文も、「グローバル・バリュー」に関する課題の一端を明らかにしている。

国際経済の荒波の中で、国内でも海外でもビジネスリーダーとして活躍できる人材を育てようとしている経営学部の研究教育活動の一環として、シンポジウムと本誌の特集を成就できたことは大変喜ばしい。尾崎・石川両教授の尽力に多くを負っている。また、学部の2本柱であるBLP、BBLプログラムの支援を得た。記して感謝の意を表したい。